私が高校のとき

山城22回　伊藤幸男

我々が山城高校に入学した一九六七年はベトナム戦争や学園紛争などで、学生運動の嵐が吹き荒れていました。入学当初、生徒総会があり、生徒会の役員が矢継ぎ早の質問にも明確に答えていくのを見て「これが高校だなあ」と感心しました。時代は激動の時期でどれをとっても楽しい話題ではありませんでしたが唯一癒されたのがフォークミュージックでした。中庭で行われた、昼下がりのコンサートには沢山の人が集まりみんなで合唱したものでした。私もフォークソングのグループを作り、学園祭ともなると演劇の舞台に混じり大勢の人の前でステージに立てる喜びを感じることが出来ました。

当時の京都はアマチュアフォークがとても盛んで山城高校にも幾つかのバンドが色んなサークルに所属してバンド活動をしていました。練習場所にはもっぱら音楽室であったりS館の踊

り場であったり、京都御所であったりとバラエティに富んでいました。

我々が高校生活最後の年の山城祭を開催する際にマンネリ化した文化祭を打破して大学祭のように模擬店を主体とした生徒が運営する文化祭を開催できるようにと学校側と交渉した事も記憶に残っています。開催直前まで、もめにもめましたが最後に学校側が折れて大変楽しい文化祭が開催出来たことは私達の年代の誇りでもあります。その年の山城祭のテーマは「既成の概念を打ち破る」でした。

今、卒業して四十年になろうとしてますが、思い返す度に自由な空気にあふれた山城での三年間の高校生活がいかに有意義であったことか・・・・

昨今、高校生が巻き込まれているいろいろな現状を見聞きするにつけある種の同情が湧いてきます。本当に良いことだったのかどうかハッキリとは言えませんが、我々が過ごした一九六〇年代後半はのんびりとした時代であったことだけは確かな事でしょう。